はじめにのまとめ　（点検読書の３つの質問はすべてはじめにを読めば答えられる）

1. どんな種類の本

ポピュリズムについて述べた教養書であり、ポピュリズムの躍進をどう考え、審査すればいいのかという価値判断を下し（民主主義の敵か希望か）、ポピュリズムとデモクラシーの関係性を分析してその調和の可能性を模索する実践書に分類される。ポピュリズムなきデモクラシーはありえないのか？→ 議論に方向性を与え、目的を定めている。

1. 全体として何を言っている？

ポピュリズムとはデモクラシーから切り離せない政治現象であり、デモクラシーの内部にある矛盾を映し出している。現代デモクラシーの隘路である。

1. そのために著者はどんな構成で概念や知識を展開している？
   1. ポピュリズムを理論的に位置付ける。
   2. ヨーロッパ、ラテンアメリカ、日本、アメリカに触れながら、ポピュリズムの成立背景、各国における展開と特徴、政治的な影響を分析する。
   3. ポピュリズムの多面性とその功罪を明らかにする。その結果４番
   4. 現代デモクラシーの隘路としてのポピュリズムの姿を明らかにする。

→結論は決まっている：ポピュリズムとはデモクラシーに内在する矛盾を端的に示す！！！

また、重要単語（索引で調べる）などもここで紹介する。

本書の目的は、この現代世界で最も顕著な政治現象であるポピュリズムを正面から取り上げ、解明を試みることである。→これのみではなく、結論として民主主義の敵か改革の希望かも見定めるので、目的に価値判断を含む。実践書！！！

二つの質問：ポピュリズムの躍進をどう見れば良いのだろう？　その猛威をどう考えたらいいのか？（価値判断）

この問いに答えるため、本は以下の構造をとる

1. ポピュリズムを理論的に位置付ける。
2. ヨーロッパ、ラテンアメリカ、日本、アメリカに触れながら、ポピュリズムの成立背景、各国における展開と特徴、政治的な影響を分析する。
3. ポピュリズムの多面性とその功罪を明らかにする。その結果４番
4. 現代デモクラシーの隘路としてのポピュリズムの姿を明らかにする。

→結論は決まっている：ポピュリズムとはデモクラシーに内在する矛盾を端的に示す！！！

ここ重要！！　**ポピュリズムなきデモクラシーはありえないのだろうか。**実践書の向かう方向性を、はじめに　の最後の文で示唆している。

1. ポピュリズムの理論的位置付け。

近年ポピュリズムはデモクラシーの敵と見られがち、でも実際必ずしもそうではない→二元的なポピュリズムの像、「二つの論理」をもつ：「解放の論理」＋「抑圧の論理」。現在でもmixed eg. Racism against Islamic ppl that is said to be in defense of gay rights and other progressive values.

ポピュリズムの二つの定義：国民に直接訴える政治スタイル（リーダーの政治戦略・手法）　＋　「人民」の立場から既成政治やエリートを批判する政治運動（政治運動としての性格）　→ **政治変革を目指す勢力が、既成の権力構造やエリート層（および社会の支配的な価値観）を批判し、「人民」に訴えてその主張の実現を目指す運動とされる。**

伝統的な左右の対立ではなく、すべての既成政治を「上」とみなし、それに対抗する絶対善としての「下」を前提した政治運動。「真の民主主義」を自認する。民主的手段を用いて既存のデモクラシーの問題を一挙に解決することを目指す急進的な運動。

ポピュリズムの特徴：

1. 人民重視。人民の定義を参照。

2. エリート批判

* タブー破り（移民糾弾など、体制に「抑圧」された自由の発現
* 既存の民主主義的政治・行政機構が人民の意志を阻害する。

3. カリスマ的リーダー。

* 制約なき「民衆の声」を代表

4. イデオロギーの薄さ

* 具体的政策、思想を持たない（ネオリベラリズムに則った自由貿易の主張→グローバル化に反対する福祉国家擁護論）
* エリートに対する反動性が唯一の一貫性

ポピュリズムと民主主義：

* 国民の意思を反映するための直接民主主義的諸制度（国民投票など）を薦める。
* ポピュリズムは代表制民主主義を攻撃する。代表＝政治エリート。
* 根本的に民主主義的な主張をするポピュリズムがなぜ民主主義と対立する存在としてよく考えられるのか？
  + 近代民主主義の二つの原理：「立憲主義的解釈」と「ポピュリズム的解釈」　詳細は下を参照。
  + 実務型の民主主義の正当性は最低でも部分的にはその救済的要素（より民主を重視した立場）に由来する、民主主義は常にポピュリズムの発生する可能性を孕み、**救済的要素が無視されてしまうと人民が疎外感を感じてポピュリズムへ向かう。**
    - ラディカルデモクラシーの例。上を批判する下の運動として共通する。
* ポピュリズムはデモクラシーに寄与することもあり、阻害ともなる。
  + 寄与する場合：
    - 政治から排除されてきた周縁的な集団の政治参加を促進。サイレントマジョリティの政治参加。（ポピュリズム政党が野党として国政に参加するときにデモクラシーは活性化する）
    - 新たな社会的・政治的まとまりの形成、新たなイデオロギーの提供。革新を可能とする。
    - 重要な課題を政治の場に呼び戻すことによって政治そのものを復権する。主権者の責任ある決定行動を促す。

以上から、人々の参加と包摂を促進し、「デモクラシーを民主化（発展させる）」

* + 阻害する場合：（デモクラシーが定着していない国でポピュリズム政党が与党となった場合）
    - 権力分立、抑制と均衡などの立憲主義の原則を軽視、多数決の過度な重視による弱者や少数者の権利無視。
    - 「そともの」との峻別意識が強く、対立や紛争を急進化。
    - 非政治的機関の権限を制限。民主的政治手段により一挙断行。
  + 対処法　**（実践的）**
    - 孤立化 – 連立政権などの協力を避ける、民主主義のアクターとしての存在自体を否定する。But ポピュリズムの既成政党批判を裏付けることになりかねない。
    - 「非正統化」「対決」- 積極的に攻撃し、その正統性を否定する。上と同じ問題が起こりうる。
    - 「適応」「抱き込み」- ポピュリズム政党を認め、その批判を受けて自己改革に徹する。ポピュリズムは反動的、一度政権の一翼を担うと弱まる。（デモクラシー自体への信認が確立していなければ効果はない）
    - 「社会化」- ポピュリズム政党を認め、働きかけてその変質を促す。上と同じ問題。

ポピュリズムを批判し、排除するのは逆にその反体制の主張に説得力を持たせてしまう。しかし、取り入れることも慎重でなければいけない。ポピュリズム政党がデモクラシーを脅かさないようにするためには、デモクラシー自体への信認が確立していることが必要だからである。（実務型と救済型の政治システムの葛藤を参照）

⇨これらの対処法は万能ではない。

第二章

主旨：　アメリカ大陸、特にラテンアメリカに着目し、「解放」のポピュリズムの展開を明らかにする。

展開：

* アメリカの人民党が最初。モノポリー、労働環境の悪化、貧困の拡大の状況を二大政党が無視したため、人民を代表して立ち上がった。
* ラテンアメリカでは寡頭政治に対抗する社会改革を求めるポピュリズム運動＝カリスマ的リーダーが特徴。
* ラテンアメリカのポピュリズムの５つの特徴
  + 交通、コミュニケーションの活用による民衆への直接的働きかけ。（周縁部を取り込む包摂性）
  + 階級間連合による既成の分画を超えた運動。
  + 輸入代替工業化と保護主義により国内工業の発達（品質、価格における国際的競争力養成を軽視）
  + ナショナリズム
  + 包摂性、選挙権拡大等により新たな有権者を支持者に変えた。
* アルゼンチンでのポピュリズム
  + 長らく労働者や農民軽視、外国資本に依存した寡頭政治が続く。
  + 急進市民同盟の台頭
  + →軍事政権→保守政権
  + 軍事政権（ペロンが国家労働局長、労働者のための改革を進める
  + 民政移管、ペロン大統領。
    - 労働福祉政策 – 賃上げ、労働者保護の社会立法、労組の強化。
    - 計画経済に基づく輸入代替工業化− 五カ年計画で中央政府の権限強化。国内工業育成強化。↔︎経営の効率性が軽視、財政赤字拡大。農業、牧畜業を圧迫。
    - 外国資本排除−インフラや基幹産業を国有化。↔︎ 国外投資の激減。公共サービスの経営効率性の低下。
    - エビータ、ポピュリズムの大衆性と持続性、そこからくる包摂性を象徴。
    - 「尊厳ある生活」で消費拡大。人民を消費者として包摂、尊厳ある生活を守るべく政治参加させた。
    - 経済停滞、独善性の強化、バチカンとのエバ聖人化めぐる対立… 権力減衰　ポピュリズムから権威主義へ。
  + 今もラテンアメリカはその経済規模の割には格差が激しく、アンダークラスが大きい存在。アンダークラスなどのインフォーマルセクターの人は従来型の政党や社会団体では代表されにくいため、ポピュリズムの直接的訴えに応じやすい。ポピュリズムの土壌が整っている。

1. 何に関する本か
   1. ポピュリズムについて述べた教養書であり、ポピュリズムの躍進をどう考え、審査すればいいのかという価値判断を下し、ポピュリズムとデモクラシーの関係性を分析して調和の可能性を模索する実践書に分類される。
   2. 要約
   3. 主要部分の順序と概要
   4. 問題点。ポピュリズムの理論的特徴、デモクラシーとの関係。
2. 何がどのように詳しく述べられているか
   1. ポピュリズムの二つの定義：
3. 固定的な支持基盤を超え、幅広く国民に直接訴える政治スタイル。
4. 「人民」の立場から既成政治やエリートを批判する政治運動。

本書では２番を採用：　政治変革を目指す勢力が、既成の権力構造やエリート層（および社会の支配的な価値観）を批判し、「人民」に訴えてその主張の実現を目指す運動とされる。（上下の対立軸を仮定、政治運動としての性格を重視した定義）。真なる人民である下が上を批判してその民意を直接民主主義的に反映させるという点で、民主的手段を用いて既存のデモクラシーの問題を一挙に解決することを目指す急進的な運動。

「人民」の定義：

1. 普通の人々（特権層と対置される）。ポピュリズム政党はこのようなサイレントマジョリティーの不満や要望を代弁（トランプの“誠実性”、Anti PC）。「健全な人間理解」＞「エリートの腐敗した発想」が定式化、それを政治に反映するのがポピュリズム政党。
2. 「一体となった人民」。個別の利益を追求する既成政治や政党に対し、一つの統合的な人民の全体利益を追うことを標榜する。民意のhomogenization, ↔︎ 民意は多様であるとする多元主義。
3. 「われわれ人民」。同質的特徴を共有する集団を人民とし、他者との区別で定義する。共通の敵となる「よそ者」を対置、統一を煽る。

民主主義の解釈：

1. 立憲主義的解釈：法の支配、個人の自由の尊重、議会制による権力抑制を重視する「自由主義」的な立場。≒実務型デモクラシー（規則や制度設定、日常のルーティン的政治行政による紛争解決）。
2. ポピュリズム的解釈：人民の意思の実現を重視し、統治者と被治者の一致、直接民主主義の導入など民主主義の要素を重要視。≒救済型デモクラシー（「よりよき世界」のため、制度や規則を超えて人民が直接参加する形態のデモクラシー）。
   1. 重要な文と主要な命題
   2. 論証。ポピュリズムは民主主義の敵？→むしろ民主的要素を備えている。

ではポピュリズムの民主主義との関係は？→民主主義は根本にポピュリズムとなりうる要素を抱えている（実務と救済）。

ポピュリズムは民主主義に寄与できるか？→人々の参加と包摂を促す、but 権限集中、制度や手続きの軽視、少数派に抑圧的に作用することもある。

* 1. どの問題を解決して、どれを解決していないか。

1. 全体として真実か。あるいはどこが真実か。また、それにどんな意義があるのか
   1. 判断留保